

寺山 鈴木平人

「寺山」は寺山修司を研究する研究室。研究員の鈴木（平）がひとり密かに考えつづける。寺山修司の「再演」（とは何か？）を思考。

役者とダンサー

たしか初年度だったと思う。役者をやっている研究員の鈴木（勇）がダンス作品に出演するということで、仕事帰りに観に行ったことがある。そのころ私はある劇場でスタッフとして働いていて、このまま劇場で働きつつ、なんとか自分の作品を形にしたいと考えている時期だった。その劇場では月に三〜四本の公演があるのだが、公演後の劇場控え室は、その日の演目の出来が良くても良くなくても、その演目の空気がずっと漂っているようなところだった。それが、正直鬱陶しくもあり、かつ、居心地良くも感じられた。ただ、厳肅そうな空気にビクついていての方が多かったように思う。

その日観に行ったダンス作品に参加していた彼とは、研究所の集まりで何度か顔を合わせ、帰り道に少し話をしたりしていた。独特な感性をもった人だなあとということと、ちよつと投げやりっぽい話し方のなかに見える誠実さが魅力的だなと思っていた。これまでは役

者として活動していたが、今度はダンス作品に参加するということで、慣れない現場だけでやってみようと思うと、そのときの公演については話していた。

その公演はいわゆる群舞で、男女大勢が参加していた。十数人のダンサーに混じって役者も数名参加していたのだが、そこで見えてきたのは、役者とダンサーの身体の扱い方の違いである。役者を見るときは、その役者の身体を通して、その役者がそのときどういう世界を生きようとしているのかを見ているように思う。そのときも、彼の身体を通して、彼が生きている世界の輝きを見させてもらったように思う。それとの対比で考えると、ダンサーの身体は、どこまでも「今」を生きようとする身体であるように思った。繰り広げられる身体の妙技からは、これまでの経験の蓄積が見えてくる。演劇は空間芸術であり、一方、ダンスは時間芸術なのかもしれない、というふうにも考えた。

このときの公演とは直接は関係ないのだが、結びつけて思い出すのが、フィギュアスケートのつまらなさである。どれだけ上手くても、なんだか発表会を見ている気分になってくるのである。滑るのに精一杯で、身体がのびのびとしていないかもしれないが、「うまく踊れているでしょ」と見せられている感じがして、身体が踊っていないように思うのだ（と個人的には思っていたが、先日、テレビで羽生結弦の演技を一緒に見ていた人が、「彼は、これまできちっとやってきたことを、人前で見せているな」と言っていて、

なるほどそうか、と思ったことがあった）。

公演終了後、前述のようなことをそのまま本人にも伝えてしまったので、次の日コケてないか勝手に心配したりした。

ひざ下五〇センチ

つくりかた研究所でなにをするか、まだ明確に決まっていなかった時期、「ひざ下五〇センチ」のことをしたいと話していた。アートプロジェクトに取り組むとき、決して表には出てこないが、それがないと成り立たない部分。アートプロジェクトは、アーティストもスタッフも、参加者や観客も含めて、みんなで同じゆめを見ようとする。その「同じゆめを見ようとしている」という目的を共有しているのが、アートプロジェクトの特性と言ってもいいように思う。その目的に向けて、各段階で努力を重ねていくわけだが、それを、一番の足元で支えているのはなにか？

個人的には、それは演技の問題として考えたいと思っていたのだが、演技というものを議論の俎上に載せると、それは無遠慮な暴力をはらんでしまいうので、結局、「演技の問題」を言い出すことはできなかった。しかし、ほかの研究者と関わりながら、一番考えたいと思っていた演技の問題を考えるためにもなにかワンクッションあった方がいいと思ひ、研

研究室体制となった段階で寺山研究室を立ち上げることにした。

寺山修司の印象

なぜ寺山修司の研究をしようと思ったか。研究所創設者の長島と話すなかで、「寺山の活動に対してなんとなくの違和感を感じている」と言ったことを拾われ、それなら、ということで寺山の著作を何作か読んでいた。たしかに活動の一つひとつ、評論も含めた文章の一つひとつはそれぞれ独自の主張があって面白いのだが、活動全体として見ると、少しパフォーマンズがかり過ぎて鼻につくような印象をもっていた。胡散臭いのである。その後、当時感じた寺山に対する違和感が解消したわけではないが、なんとなくの目処は立った。寺山には、「見世物の復権」と言ってみたり、これ見よがしなところはあると思うのだが、それとは別に、ある目的に向けて、明白に、人工的になんとかしようという雰囲気がある。違和感の理由は、その人工的な手つきだけが目について、その目的がわからなかったせいなのかもしれない。

マッチ擦るつかのま海に霧深し身捨つるほどの祖国はありや

美輪明宏は、寺山修司をカラージュの芸術家だと評する。この短歌は、寺山の諸作品のなかでも私が好むもののひとつだが、ここでは、言葉によるカラージュの技法を駆使して鮮烈なイメージを生むことに成功しているように思う。その強烈なイメージからは、寺山が終始囚われ続けた、敗戦後の日本の状況や故郷青森のことが鮮やかに浮かび上がる。そして、寺山作品の、もともと見事で、いまでも繰り返し読まれるべきものはこの類のものだと感じている。ポケットに忍ばせておき、絶えず自らを律してくれるようなものである。そのようなカラージュによって生じるイメージの強烈さと、その先に偶像的に現れてくる「母」というテーマについて研究してみようと思い、著作を読みながらとったメモをほかの研究員とも共有し、なんとなくの反応を伺っていた。しかし、研究室として具体的に動き出すところまでは至らなかった。「マッチ擦るつかのま海に霧深し身捨つるほどの祖国はありや」と言ったときに生じる切断の感覚が、結局、個人的なものでしかなく、演劇としては、それを他者と共有するための回路をなんらかの形で構築しなければいけなかったのだが、それがいまのところは実現できていない。

寺山修司と「再演」

二年目に行われた『だれかのみため 展示と実演』には、結局予定が合わず参加を見

送ったのだが、初期の打ち合わせでは、寺山研究室として「再演」をテーマになにか作品を発表したいと話していた。つくりかた研究所の寺山研究室で、どうしたら「再演」がテーマになるのか。個人的に寺山の真髄は、先に引用した短歌に現れてくるような、故郷の面影を強烈に残す一瞬の身体イメージだと思っていて、それは、私たちの意識に切断をもたらずにこそが効用であると思う。身体イメージとはたとえ一瞬でも具体的なものであり、他者の身体イメージを読み取ることは、私自身の意識にとってはある種の切断をもたらすものだと思う。とすれば、それを実際に出現させるものは、具体的には「再演」という形をとるだろうと考えていたのだ。短歌における一瞬の身体イメージを、実演あるいは展示として現すためには、「再演」であることがわかっているうえで、それでも新たなものとして取り組むという姿勢こそが適切ではないかと考えていた。

しかし、寺山は演劇作品においては偶然の出会いを組織することを考えていたので、「再演」というテーマについては、字義どおりに考えるなら相当遠いものだ。でも実は繋がっていないか？ むしろ演劇の本質を言い当ててないか？ ということを言いたかったのだろうが、それを言うためには、演劇の上演までしっかり構築する必要があるだろう。しかも、ここで言わんとしているような「演劇の本質」などはなく、上演してしまえば演劇なのであって、というところがまず、とくに寺山にはあるので、やはりちよっと無理筋と

いう感じがする。しかし、そうも言い切れないのは、上演してしまえば演劇だとは言っても、その、上演するということが自体に潜む再現性のうちに、意識の切断と「それでも」の再演ということがあって考えているからだと思う。演劇という形式自体が、そもそも「それでも」で支えられた形式だということ。演劇の本質としての再現性をよりはっきりさせるための方法として、寺山研究室では「再演」ということを考えていたのだと思う。なにかを再現しようとするときに必然的に生まれる状況の置き換えが、いたるところに偏在する世界の輝きを表現するのである。

寺山が生きた時代背景も考慮に入れて、彼の活動を考えてみる。特攻隊までも生み出してしまような日本人の心性が、敗戦後の日本人についても実際あまり変わっていないか？ たのではないかと推測するのだが、そのことと、それでも経済成長を成し遂げるための実際的な苦労との間にあるものとはなにか、という問いかけが、寺山の活動にはあったのではないか。その問いかけを演劇で現そうとしたとき、寺山の活動は「再現性」という演劇の本質的なところからのアプローチを、知らずにとっていたのではないだろうか。そのことが、コラージュという特性として現れているのではないか。

「寺山の戯曲からワークショップを立ち上げる」

『展示と実演』には参加を見送ったわけだが、予定が合わなかっただけではなく、当時はまだここまでのことを言い切ることができなかつたからだと思う。演劇を純化させていったときに残る「再現性」と、それに付随する状況の置き換えという問題。そして寺山を題材にとるなら、この純化していく過程で（その題材がたとえエッセイであつても）必ず身体を巻き込む。意識の切断とそこから渦巻き始める新しい身体性、みたいなことをなんとか取り出したいと考えていた。そして、そのことが「ひざ下五〇センチ」と言つて考えようとしていたことだと思う。

マイペースで進めようと思い、まずはとくにメンバー募集もせずに、一人でぼちぼちと著書を読むところから始め、著書を読みながらとつたメモを、研究員のメンバーで共有できるところに上げていった。当初は、「寺山修司の戯曲からワークショップを立ち上げる」という、その意味するところがよくわからないことを、よくわからないまま目標として掲げて活動に取り組んだが、いまのところ、まだワークショップを開催するまでには至っていない。